

My Singapore わたしのシンガポール

ヤング靖子

「あなたにとってシンガポールとは(一言で)」これは昨年、シンガポール政府観光局東京支局の「もっと夢中に出会う場所」というインタビューをコーディネートした際に、送られた質問リストの最後にあった項目です。「一言で」は難しいなあと思いました。皆様からはどんなお答えが返ってくるでしょう。

私はこの国でバレエの面白さを教わりました。きっかけは主人のバレエ教室で、教えてくれたのはシンガポールダンスシアター(SDT)でした。舞台鑑賞を楽しむ姿に「自分も踊りたいのではないか」と気付いたのは妻の直感です(!)。四十の手習いと申しますが、天命を知ろうかという齢で照れくさそうな本人に代わり、お教室を探して最初に見つけたのがSDTでした。「是非どうぞ、世の中には色々な女性がいてのだなと良い社会勉強になると思いますよ」と受付の方に背中を押され、そのタームの初級クラス唯一の男子生徒が誕生。こうして週末に私が日本語補習校に通う間、主人は現役のダンサーの方々から、体の隅々の筋肉を使う面白さ(と辛さ)や優雅な動きを覚える愉しさを習いました。そして楽しかった時間のお礼にとささやかな寄付をしたところ、思いもかけないスタジオへの招待状が届いたのでした。踊り手の息遣いやコツコツと響くトゥシューズの音まで聞こえる近さで見るバレエの迫力、終わった後のダンサーの方達のフレンドリーさ、そして芸術監督による舞台裏のお話は興味深かったこと。目を丸くしながらお話を聞き入る私たちに、こんなに何も知らない人がドナーになったのかと監督はびっくりされたかもしれません。

間もなく、アウトリーチ(社会奉仕活動)の担当者から「ヤスコはひょっとして先生ではないか」と問い合わせが来ました。様々な学校に出張授業に行っているが、日本人学校にどうやってコンタクトを取ったらいいか分からず困っているという相談。それを聞いて、昔日本人学校で通訳ボランティアとして校外学習をお手伝いする傍ら、先生方がシンガポールに関係する授業の組み立てにご苦労されていたのを思い出し、国際的な集団で、なおかつ幼い頃の夢を叶えた人生の先輩達は子ども達にも良い刺激になるのではと閃きました。監督からも、手塩にかけて育てた日本人ダンサーの舞台を日本のお客様にご覧頂きたいという希望を伺っていたので、新しい友達を今までの友達に紹介するような気持ちで、日本人コミュニティにご紹介する一人ミッションが始まりました。

シンガポールには娯楽としての芸術を根付かせる難しさがあります。それは舞踊だけではなく音楽や美術も共通に抱える課題です。芸術監督を始めアートシーンを見守ってきたご臍筋、舞台を陰で支えるスタッフ、ダンサー、オーケストラの関係者など、新しい友人達からは学ぶことが多く、アートの領域を超えてビジネスとは、シンガポールとは、と考えさせられることもしばしばです。シンガポールのアートコミュニティは大きくはありませんが、コミュニティの親しさがアートそのものも親しみやすくしているような印象を持ちます。同時に、海外の専門誌に取り上げられるほど高いレベルを誇りつつ、社会活動に労を惜しまないカンパニーの姿勢も個人的には応援したくなる理由の一つです。ささやかな感謝の印を贈ったつもりが、カウンシルメンバーというお役目を通して、私たちの方が得難い出会いや貴重な経験を豊かに頂いてきました。My Singapore、私の答えは「出会いの大切さを教えてくれる国」です。出会いは幾つになっても大切な成長の糧だと実感します。



山崎大使をお迎えしてのビューイング
(みんなワクワクでした。2019年)

初代首相リー・クアンユーはシンガポールの未来を「熱帯グローバル創造的芸術都市国家(A tropical global creative art city-state)」と提唱しました。SDTもシンガポールの文化的アイコンとして、上質な舞台をプロデュースしつつ将来のダンサーや観客を育てていくことを目指しています。芸術界が目標の途上にあるのは衆目の一致する認識ですが、その成長を間近で応援できるのは建国55年の若いこの国と交わるユニークな機会だと思います。アートシーンで活躍する日本人はダンサーだけではなく、シンガポールシンフォニーオーケストラやラ・サル美術大学等、多方面にいらっやいます。長い歴史と豊かな文化をもつ真逆の日本から来た私たちだからこそ、この国の“良いところ”は案外見つけ易いかもしれません。



スタジオでのフルリハーサル
(左側から筆者、芸術監督ヤネック・シャージェン、右側奥に指揮者ジョシュア・タン、ピアニスト ガブリエル・ホー)



メトロポリタンフェスティバルオーケストラとのリハーサル
(指揮者のジョシュアからはジャンプの着地一つでもテンポが変わるほど舞台は繊細な芸術だと教わりました)

アートに限らず、今まで知らなかったシンガポールとの出会いがあったら、「とりあえず楽しんでみる」ことをお勧めします。垣根は案外低く飛び越えられて、新しい仲間と何か一緒に始めているかもしれません。新しい発見や成長の種が見つかるかもしれません。“出会いの化学反応”の面白さですね。どこを探したらいいのかな、と思っていらっしゃる方は、外国だからと新しいフィールドで遠回りするのではなく、得意の分野を近道に選んでみてはいかがでしょうか。「自分が好きなことをしていたら、その自分を良いと思ってくれる人が現れると分かりました」。先月のインタビュー記事で、中学高校時代を回想する悟さんの言葉です。コロナ禍で日常生活に色々な変化が起こる中、#support local artや#support local businessといったハッシュタグがSNSに登場するようになり、ローカルコミュニティを支えようという流れが出てきました。美しいものを創り出すアーティスト達が自分の住む街にいるというのは幸せなこととしみじみ感じます。

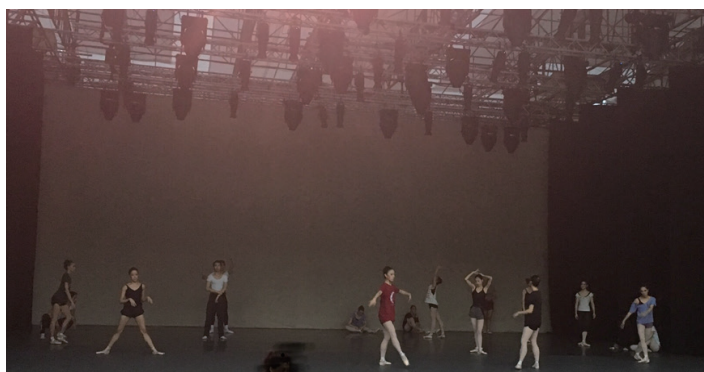
この連載も最終回となりました。毎月、原稿を丁寧に校正して下さった編集部の皆様、そしてお読み下さった会員の皆様に心から感謝致します。いつか劇場でお目にかかる機会がありますように。



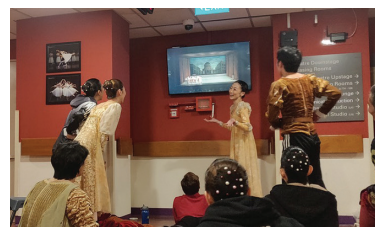
白鳥の湖で主演を演じたクォーク・ミンイーと峯岸伽奈さん
(ミンイーはシンガポール人初のプリンシパル昇格で
話題になりました。撮影ジェイソン・カーター)



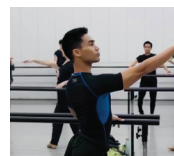
舞台リハーサルで芸術監督の指示を聞く
(2020年ロミオとジュリエット)



野外公演「Balle Under The Stars」の公開リハーサル風景(2019年)



舞台裏で和気藹々とモニターを見る
(ロミオとジュリエットより)



シンガポールダンスシアター
アーティスト一同 (SDT提供)
上は撮影後に入団したJ・デディオス

著者プロフィール／近況
ヤング靖子

Ambassadors Council of Singapore Dance Theatre

私にとっては、この連載も大きな出会いで、沢山の学びを頂きました。駐シンガポール日本国特命全権大使として初めてエスプラネードにお越しいただいたのが現在の山崎純大使と大使夫人です。「正真正銘の大使閣下に、アンバサダーを名乗るのは大変おこがましいのですが」と申し上げると「いやいや。アンバサダーは大事なお務めですよ◎」とユーモアあるお言葉を頂きました。海外に住むということは、一人一人が日本人として矜持を正す機会を与えられるということかもしれませんね◎